



KANSAI
UNIVERSITY

CTL

Kansai University Center for Teaching and Learning

Newsletter

関西大学 教育開発支援センター
ニュースレター

March 2016

vol. 20

アクティブ・ラーニングがいざなう Liberal Arts 教育

教育推進部 副部長 山本 敏幸

大学に入って学ぶ教養科目の位置づけについて考えてみたい。教養科目は専門科目を学び研究を始める前の心構えやある分野の人間の一般的な素養を身につけておくための科目群である。18歳まで親と同居し、衛生面、栄養面、経済面等のほとんどの生活の営みや心身の成長を親まかせで生きてきた子供が大学卒業時社会人として巣立っていくまでの4年間の大学生活で先ず履修する科目群である。ということは、これらの科目の履修を通して、大人としての社会的人間性が育まなければならないはずだ。

現に人間性ある医師の育成にと、コロンビア大学の医学部では、医療の知識しか持たずに人間性のない人間として深みのない医師ではこれからはいけないと、人間性育成のために絵画、芸術や音楽のカリキュラムを取り入れたそうだ。人間性のある医師となって、人生を送ってほしいという願いが込められている。

大学とは、ただの「社会人養成のための学舎」ではなく、人間性のある未来人を育てることが真の使命だと思う。つまり、大学とは人間性教育を基軸にしてアカデミックな環境で学ぶことが担保されないといけないところであろう。そのためには、教養科目を人間科学 (Human Science) の領域に位置付け、単なる知識情報の伝授や解釈に終始するカリキュラムではなく、人間の営みに関わる経験科学として位置付けなければならない。

こんなことを考えていたら、赤レンガの建物が青い空に映えるサザンイリノイ大学の光景が浮かんできた。イリノイ州の南の田舎町、カーボンデールにある赤レンガの校舎が印象的なサザンイリノイ大学を訪ねて久しくなる。何もない田舎道の横にポツンとたたずむこの大学はアメリカの教育に深く貢献してきた。ここは、1900年初頭の産業革命で賑わっていた時期、今から100年以上も前に、学習者主体のアクティブ・ラーニングを提唱し、実践していたJohn Dewey教授が教鞭をとっていた大学である。

John Dewey教授は教育者とはヒポクラテス宣誓を教育の場で実践し、これからの社会で活躍・貢献していく学生たちの模範となるようにお手本を示し、巣立っていく若者たちもヒポクラテス宣誓を実践していくことを願っていた。ヒポクラテス宣誓とは「学問を修めた者は、その知識を自らの倫理と責任に基づいて、人類や社会のために正しく用いていくことを誓うべきである。」というものである。大学で得た知識を安心・安全で平和な未来社会構築のために活用する知恵をもってこそ、豊かな価値が生まれてくるはずである。大学は知識だけを身につけるところではなく、それを活用する知恵を育まなくてはならない。そうすることで、自身の人生にも社会にも新たな価値を創造する力が生まれてくる。これを実践的に育むのが本来のLiberal Arts教

育(教養教育)ではないかと考える。

教養教育の目的は、自身の専門知識に限定するのではなく、他の学問との関係性を深め、俯瞰的に多視点から知恵を育むことである。これは、「言うが易し」であるが、私がまだアメリカの大学で教えていた頃1990年後半から2000年初頭の間は、いろいろな学部の科目をアラカルト的に選択して履修するインターディシiplinary教育やいくつかの専門分野を統合化して多視点から専門分野の知識を学ぶインテグレイティッド・カリキュラムが試されたがどれもうまくいかなかった。失敗の原因は3つある。教育パラダイムが従来型の専門知識を身につけるだけの教育パラダイムで、学習環境にアクティブ・ラーニングを導入していなかったこと、学習者主体の学びの概念がなく、学習者がチームベースで学びを進めるPBLが普及していなかったこと、教員自身がチームワークで教育ができず、学習者に混乱や誤解を招き、いいロールモデルが示せなかったことが挙げられる。つまり、教養教育にはアクティブ・ラーニングに基づいた社会構成主義の教育パラダイムが根本になければならない。教養教育では、新しい価値を認める開かれた心、倫理観、優れた教養と知恵を身につけた全体人間を育てていかなければならない。つまり、教養教育はアカデミックな人間科学 (Human Science) の分野なのである。

フォーラム・セミナー報告

KU-COILシンポジウム・ワークショップ2015を開催しました

日時：12月4日(金)・5日(土)
場所：図書館ワークショップエリア

平成27年12月4日・5日の二日間にわたって、昨年の第一回に続くCOIL(オンライン国際交流学習)に関するシンポジウムおよび英語で教授する専門科目担当者を対象としたワークショップを図書館のワークショップエリアおよびMi-Room(マルチリングル・イメージルーム)にて開催した。本年度は、COILのような国内の教育の国際化を促進する取り組み(例えば英語にて開講する科目の充実など)をテーマとして、国内外の教育者・関係職員そして本学関係者を対象とした。1日目はワークショップを午前・午後をわたり展開した。EMI(English Medium

Instruction)を国内で進める上で問題になる点を洗いだし、ブラジル・メキシコ・マレーシア・UAEなどといった各国の大学での事情を参加者に共有してもらった。日本におけるEMIの導入はまだ歴史が浅く、本学を含めその教育の質の確保に試行錯誤している段階にあるが、海外の大学においても同様の事情に直面しつつも解決策を探り一部全学部の科目を英語で開講するまでに至っているような機関もある。ワークショップでは、どのような国際学生がその大学へ留学し、どのような(EMIを含む)カリキュラムを望むのか、といったその地域や機関ごとの特色についても配慮が必要であるといった意見交換も行った。午後のワークショップではアクティブ・ラーニングそしてCOILのような活動を行う上で、不可欠となるICTの具体的活用例について、参加者らに実際に課

題に取り組んでもらった。学生目線で、彼らの日常においてどのようなICTツールにアクセスがあるのか、また国際交流を特別なものとしてではなく毎日のコミュニケーションとして位置付けてもらうためにはどのようなツールを選択し、どのようにタスクを課せば効果的なのか、といった教育効果に主眼を置いたワークショップとなった。

2日目のCOILシンポジウムでは、昨今の国内の国際教育事情についてグローバル人材育成教育学会の小野博会長・国際教育大学のピーター・マッキヤグ副学長に基調講演いただき、その後本学で平成27年に展開したCOIL授業についてポスターセッションの形態にて発表を行った。第一回シンポジウムであった昨年度から、本学におけるCOILの導入事例は確実に増加しており、4月より新たに2名の特別任用教員(教育推進部)が加わり次年度の充実がさらに期待できる。本シンポジウムにおいて本事業の進捗と今後の展望を広く発信することができた。また、国内の他大学での導入にもつながっており、喜ばしい限りである。

(国際部 池田佳子)



シンポジウム&ワークショップの様子

学生ラーニングCaféの輪が広がっています！

教育開発支援センターでは、学習支援の一環としてラーニングCaféを継続して実施しています。開始当初は教員が主体としてCaféを実施していましたが、最近ではCaféを支援してくれていた学生スタッフであるラーニングアシスタント(LA)が主体的にCaféを企画、運営しています。現在はLAが主催する、「学生ラーニングCafé」と教師を志望する学生や教育に関心を持つ学生を対象とした「教職ラーニングCafé」の開催数も増えてきました。

2015年度春学期、秋学期の学生ラーニングCaféで扱ったテーマは「文章の要点つかむコツ」、「PREP法」、「グループワークの役割分担」の3つです。LAが各テーマについて2人ずつ担当し、企画、運営をしました。LAは「学生としての自身の学びや躰きの経験」、「LAとして授業をサポートしている経験」から、どのような学部の学生でもこれら3つのスキルは必要で、卒業後も

身につけておくべきものだと考えCaféのテーマを決めました。

「文章の要点つかむコツ」では、参加者は要約に取り組みました。参加者は新聞記事を読んで段落毎にトピックセンテンスを作ってもらってワークに取り組み、作った文章を数人で共有しました。ほかの学習者との共有をワークに取り入れることで、活気のある雰囲気作りを心がけられていました。

教職ラーニングCaféでは、教職を目指す人に焦点を当て、教師にとって必要な知識や考え方を学び、教育課題に対して自身の考えを述べたり、話し合ったりすることを目的としています。教師になるつもりはないけれども、教育に興味がある人にも参加してもらえるようなテーマを設定しています。

例えば、「道徳の教科化」をテーマとしたCaféでは、自身の道徳観を見つめ直し、その道徳観を伝える方法をみんなで考えまし

た。また、カウンセリングマインドをテーマに、実際にカウンセリングマインドの手法を用いて会話をしてみるといった、実践的な活動も行いました。

具体的な進め方の手順としては、初めに、教育課題について議論するための基礎的な知識や新聞記事について講義形式で話し、その後、それら知識を用いて自分の考えをまとめ、発表する時間をとっています。

実際に参加してくれた学生は様々な学部に所属しており、普段関わることのない学生同士のコミュニケーションにより、新たな視点を持ったり、自分の考え方が変わったりする楽しさ、新鮮さを感じていただけたと思います。ラーニングCaféは春学期も実施します。新学期も「学生ラーニングCafé」「教職ラーニングCafé」を楽しみにしててください！

(LA 今津彩子、富永峻史、金山遥香
教育推進部 岩崎千晶)

Learning Assistant

LA 活動報告

本学LAがさまざまな場面で活躍しています。

(1)九州(熊本)での交渉学セミナーに参加しました

12月5日、熊本市にある富士ゼロックス株式会社において、VHP 交渉学コミュニティ主催の交渉学勉強会があり、昨年に引き続き、本学LAが活躍しました。

参加者数は26名(=社会人 21名+学生 5名)でした。学生の内訳は関西大学LAが2名(松田、大早)、追手門学院大学生1名、熊本学園大学1名、熊本県立大学1名であ

り、これから交渉学を学ぼうとする社会人に対して、アクティブ・ラーニングによる交渉学の学びの導入と、グループワークでのファシリテーションを行いました。



(2)九州(博多)での交渉学セミナーに参加しました。

12月6日、前日の熊本市の交渉学勉強会に引き続き、博多市にある富士ゼロックス福岡株式会社で、交渉学コミュニティ主催の交渉学セミナーがあり、昨年度に引き続き本学LAが参加しました。

参加者数は26名(=社会人 23名+学生 3名)でした。学生の内訳は関西大学LAが2名(松田、大早)、追手門学院大学生1名でした。

これから交渉学を仕事の場で活用しているという社会人に対して、大学生のアクティ

ブ・ラーニングによる交渉学の学びの実践紹介、大学生活、日常生活における交渉学の学びの活用事例を学生目線でわかりやすく、スキットを交えてプレゼンテーションを行いました。

後半では社会人と学生が混合チームを構成し、交渉学のケーススタディ事例を使い、グループワークでのディスカッション、ロールプレイシミュレーションによる臨場感ある模擬交渉を体験しました。本学LAもファシリテーター兼チームメンバーとして体験学習に参加

し、日頃の交渉学、クリティカルシンキングの授業での経験が役立っていました。



(3)京都大学の授業に参加しました。

12月3日、スタディスキルゼミ(交渉学入門)非常勤講師の松木氏が京都大学の交渉学のゲスト講義を行いました。京都大学「情報と知財」という授業(情報学研究科田中克己教授・谷川英和講師担当)で、著作権、

特許、知財管理、個人情報保護、情報セキュリティ、情報倫理に関する分野で活躍する著名人がゲストスピーカーとして講演・討論を行う授業です。アクティブ・ラーニング型交渉学教育の一環として、交渉学LAの田中

真奈(2年)さんが関西大学におけるアクティブ・ラーニングの実践経験を豊かにするため、ファシリテーターとして参加しました。写真はその授業の様子です。



(教育推進部 三浦 真琴)

「クリッカーの活用」「シラバス設計」に関するランチョンセミナーを開催しました!

お昼休みという短い時間を活用して先生方とぎゅっと詰まったお話をさせていただきランチョンセミナーを開催しました。今回のテーマは、「クリッカーの活用」と「シラバス設計」についてです。

「クリッカーの活用」では授業での利用方法と実際の操作手順についてお話をしました。関西大学では5年ほど前からクリッカーを導入し、主に多人数講義で活用されています。クリッカーの利用方法としては、まず教員が学生に質問と選択肢を出します。その回答をする際、学生はクリッカーのボタンを使って該当する選択肢を選びます。その結果が瞬時にモニターに提示されます。たとえば、「SWATモデルのSは次のうち何を指すか」など前回の授業内容に対する復習として小テストをすることもできますし、「缶

コーヒーのCMを視聴した印象は次のうちどれにあたるか」という質問を出し、「優雅である、親しみやすい」等の選択肢をいくつか用意し、結果をもとに学生同士に意見交換をさせることで学生の多様な意見を引き出すこともできます。様々な利用方法がありますので、ぜひご活用ください。なおクリッカーの予約に関しては授業支援グループまでご一報ください。

「シラバス設計」では、インストラクショナルデザインの考えをもとに、シラバスをさらによくしていくための手立てについて紹介しました。短い時間でも参加いただけるように30分コースとしましたため、参加者は多かったのですが、先生同士で意見交換をさせていただき時間を十分にとれませんでした。次回はご希望に応じて、先生方に気軽

にお話しいただける場も設けたいと思います。

2016年度もランチョンセミナーを開催していきますのでどうぞよろしくお願ひ申し上げます!!

(教育推進部 岩崎千晶)



レスポンスカードとレシーバー

授業支援ツールの紹介

関大LMS (Learning Management System)

関西大学では、平成28年度から新たに「関大LMS」の運用を開始します。関大LMSは、Web上での教材作成、テストの実施やレポートの採点など、授業に必要な機能を網羅しております。さらに、メッセージ機能や会議室機能などにより、受講生—教員間や受講生同士のコミュニケーションを促進することで、教えと学びの双方を支援します。また、スマートフォンやタブレットに最適化された

インターフェースを用意し、多様なブラウザにも対応しているため、ユーザーの環境に合わせて活用することが可能になります。

今後、教育開発支援センターでは関大LMSの活用促進に向けたセミナーなどを開催していく予定です。詳細は教育開発支援センター Web サイトなどでご案内します。

関大LMSの主な機能(一例)

資料の配布や提示	教員がPC上で作成した資料 (Word, Excel, PowerPoint など) をアップロードできます。
テストの実施	テストの作成及び実施ができます。制限時間や受験回数などを設定可能ですし、音声や画像ファイルを問題文の一部としてアップロードできますので、柔軟な作問を行えます。また、自動採点もできますので、学生への即時フィードバックや採点にかかる負担軽減にも有効です。
レポートの採点	レポート課題を提示し、回収・採点・添削を行うことができます。未提出者への督促や再提出の指示をメール送信により行うこともできます。また、類似レポート検知機能もあります。



関大LMS トップページ

From CTL 事務局

「教育開発支援センター」という組織が学内にあることを知っている学生は、どれくらいいるのだろうか。本誌「ニューズレター」を手にする学生はどれほどいるのだろうか。ラーニングアシスタントやティーチングアシスタントに従事している学生にとっては当センターの存在は周知のことであるのだろうが、ほとんどの学生にとっては、残念ながらセンターの認知度はかなり低く、厳格さが漂う近寄りづらいものに写るのかもしれない。今号は、新入学生も

手にする機会もあると思われるので、センターをほんの少し垣間見たいと思います。

本センターは、関西大学の教育内容・方法を改善していく取り組みや教育効果の評価方法の開発など授業をより良くしていくことを念頭に企画実践する組織で、学生の皆さんが、日ごろ受講している講義を更に発展させる緑の下の力持ち的な存在なのです。身近には、授業評価アンケートの企画運営や今号で取り上げた双方向授業ツール「クリッカー」など授業を行ううえでの優れたものの活用事例を紹介するなどを通じて教育の質向上を支援する

組織と言ったほうが解りやすいのかもしれませんが。教育(授業)は、先生と学生がともに教えともに学ぶことにより相乗効果が生まれ発展向上していくものだと思います。この組織の英語名称は「Center for Teaching and Learning」と言い、教え学びが重要な性を端的に示していると理解しています。学生の皆さんも教えと学びの共同体の一員として、このニューズレターの愛読者になってもらい、教育開発支援センターの活動に目を向けて寄り添ってもらえればありがたいと切に願っています。

(勝)



KANSAI UNIVERSITY

関西大学 教育開発支援センター Kansai University Center for Teaching and Learning

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35 TEL: 06-6368-1513 FAX: 06-6368-1514

<http://www.kansai-u.ac.jp/ctl/index.html>

発行日/2015年3月29日 編集・発行/関西大学 教育開発支援センター